
ポケットティッシュ配りの少女

雛祭パペ彦

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ポケットティシュー配りの少女

【Nコード】

N5033A

【作者名】

雛祭パペ彦

【あらすじ】

「マッチ売りの少女」のパロディ小説です。

足元にあるダンボール箱を見下ろしながら、ポペ子は途方に暮れていた。箱の中身は、大量のポケットティシューで、まだ2箱半、およそ2500個が残っているのだ。

「ぜんぶ配って来いよコラ！ 1個でも余ってたら日給払わねえぞコラ！ ずっと見張ってるからなコラ！ ズルしたら逆に罰金払わせるぞコラ！」

バイト先の893はそう言っていたものの、見張っていないことくらいはポペ子も知っていた。しかし、たとえ見張られていなくても、ズルをして2000個以上ものポケットティシューを処分するのは、案外むずかしかった。

とにかく、ポペ子は配りまくった。

そして、夕方のラッシュ時が過ぎると、なんとか残り800個近くにまで減らすことができた。

大都会の繁華街ならばいざ知らず、ポペ子がいるのは地方の小さな駅前周辺だった。だから、帰宅ラッシュの時間帯が過ぎてしまえば、あつというまに人の姿が少なくなる。

それから数時間のあいだ、底冷えがする寒空の下、ポペ子は必死になって、半ば投げつけるようにして、通行人にポケットティシューを配り続けたが、午後11時近くになっても、まだ500個以上も残っているという体たらくだった。

ポペ子は、ぜんぶ捨ててしまおうかと思った。

しかし、それは出来なかった。

バイト先の893の話によれば、たとえ配りきれずに残ったポケットティシューを捨てたとしても、必ず発覚する。

1つや2つ落ちていることは珍しくもないが、それが10個以上ましてや数百個ともなれば、それを見つけた人間の苦情が、ティシューに付属している広告のスポンサーを通じて893の元へ届くというのだ。

それなら燃やしてしまおうと、ポペ子は思った。

ポペ子は、大量のポケットティシューを燃やすのにちょうど良い橋架下を知っていた。そばには釣り船がすれ違えるくらいの幅の川があるので、火事の心配はない。すでに深夜0時をまわっていたので、人目につく恐れも少なかった。

その橋架下には、黒褐色の鉄錆が浮いたドラム缶があった。たまに、ホームレスの皆さんが、ここで暖を取るために使っているのだろうと、ポペ子は思った。

ライターを取り出し、ポケットティシューに火をつける。

ポペ子は、それをドラム缶の中に落とす。そこには、前もって大量のポケットティシューを敷き詰めてある。

まず、ナイロンのパッケージが燃えて、つぎにスポンサー広告の紙が燃えて、10枚ほどのティシューの束へと燃え移っていく。みるみるうちに炎は広がり、疲れ果てたポペ子の表情を照らし出す。ドラム缶から火を借りて、ポペ子はタバコを喫いはじめた。

ポペ子は暖をとりながら、退屈そうに、燃えさかる炎を眺める。

とりあえず、これで売れ残りのティシューは全部無くなるし、バ

イト代も受け取れる。その一方で、わずかながらの後ろめたさも感じていた。

2本目のタバコを取り出し、ポペ子が、ぼおっとしながらドラム缶を眺めていると ふと、燃えあがる赤い炎のなかに「人影」が映し出された。

かわいい顔をした、少女が1人。

そばには、大人の男女が二人座っていた。きっと両親なのだろう。三人は、テーブルを囲んで食事をしていた。

皿の中心には、上品に盛り付けられた魚の切り身。

それを、女の子はフォークとナイフを使って、器用に口へと運ぶ。

三人とも、楽しそうに笑顔を浮かべている。

とても幸せそうだった。

少女たち3人は、盛装をして食事をしていた。幼いときに両親を亡くしているポペ子には、無縁な情景だった。

幼いころのポペ子の食事といえば、養護施設の大広間で食べるのが当たり前だった。炎に映し出された少女と同じ年齢のころ、皿に盛り付けてあったのは、良くても冷めた塩鮭の切り身だった。

しばらくすると、ドラム缶の炎の勢いが弱くなってきた。

先に放り込んだポケットティシューは、だいぶ燃え尽きていた。炎に映る幸せそうな情景も、ドラム缶の中へと身を乗り出さなければ、眺めることが出来なくなっていた。

慌てたポペ子は、残りのポケットティシューをドラム缶へとブチ込む。

すると、炎は勢いを取り戻し、ふたたび、目の前に幸せそうな家族の団欒が現れた。

あいかわらず、楽しそうに少女は笑っていた。
そばにいる両親も、笑顔を浮かべている。

それに触発されるようにして、ポペ子の頬の強張りも緩んでいった。自分が得られなかった幸せに嫉妬するどころか、胸が弾んでいた。ドラム缶から立ち上る大きな炎を前にして、身体だけでなくポペ子の心も暖まっていた。

唐突に、少女から笑みが消える。

そばにいた父親と母親も、顔色を変えて椅子から立ち上がった。

炎の幅はさほど広くないので、少女たち三人の周りの様子を、ポペ子は知ることができない。

何が起ったのだろうかと、ポペ子は、燃えさかる炎に向かって身を乗り出した。

父親が血相を変えて、ドレスを着ている少女を抱きかかえる。

大事なところで、また、ドラム缶の炎の勢いが弱くなりはじめた。橋架下を吹き抜ける風は、ますます強くなっていた。

いまドラム缶の火を消すわけにはいかなかった。炎の中の家族に、何らかの異変が起こっているのだ。続きが気になる。

軽いパニック状態に陥ったポペ子は、残っているポケットティシューを、ダンボール箱にあるだけ、ドラム缶へと放り込んだ。

吹きすさぶ強風も手強い、ドラム缶からは、ごおっと火柱が立った。

炎の中には、泣き叫ぶ少女の姿があった。

炎に映っているだけではない。

炎に包まれた少女が、炎に映っているのだ。

テーブルが炎をあげている様子も、炎に映っていた。

父親に抱きかかえられたまま、少女は目を大きく見開き、まさに火ダルマとなって、泣き叫び続けていた。

ポペ子が見守るなか、ドラム缶の炎に映る少女は、次第に炎そのものへと変わっていった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5033a/>

ポケットティシュー配りの少女

2008年11月7日08時12分発行